

パプアニューギニア，ファス族におけるサゴヤシ利用について

栗田博之

東京外国語大学 〒114 東京都北区西ヶ原 4-51-21

Exploitation of Sago Palm among the Fasu, Papua New Guinea

Hiroyuki Kurita

キーワード 神話，パプアニューギニア，ファス族

ファス族はパプアニューギニアの南部高地州，クトゥブ湖とヘギギョ川にはさまれた地域周辺に居住する民族であり，1980年の統計によればファス人口調査区の人口は1024人である。ファス族の居住地域は標高300～800mの森林地帯であり，ニューギニア高地とは幾重にも重なった山脈によって隔てられている。このように高地に隣接する地域は通例「高地周辺部」と呼ばれるが，ファス族の文化はいわゆるニューギニア高地文化とはかなり異なっており，高地との文化的類縁性は弱く，むしろ西はカリムイ山から東はストリックランド川まで広がる低地パプア文化に属している。

サゴヤシ利用

ファス族の居住地域の周辺にはサゴヤシの自生する広大な湿地帯が広がっており，ファス族はそのサゴヤシの髓から採取したデンプンを常食とするサゴ採集民である。自生するサゴヤシの利用が中心であるが，移植を行うこともしばしばある。高地民の主食であるサツマイモは，ファス族にとってはほとんど重要性をもたず，また，タロイモ，ヤムイモも同様に重要ではない。焼畑移動農耕を行っているが，農作物はサゴデンプンを副次的に補うに過ぎない。狩猟による小型の哺乳類や鳥類，川での漁撈による小魚，それに採集されるサゴヤシにつく甲虫類の幼虫等が重要な動物性蛋白源となっている。豚の飼育も行っているが，豚肉は祭宴などの特別の時に消費されるに過ぎない。

ファス族がサゴヤシからデンプンを採取する場合，ほとんどの仕事は女性によって行われる。サゴヤシを切り倒し外皮を剥ぐまでは男性が行うこともあるが，それ以降の仕事，すなわち，サゴ・ハンマーで髓を砕き，サゴヤシの葉柄の部分でつくった作業台に移し，水をかけ，棒で叩き，フィルターを通して容器に流し込み，沈殿し

たサゴデンプンを集めるという仕事は，すべて女性によって行われる。

ファス族のサゴヤシに関する民俗植物学的知識はかなり発達している。デンプンの採取に利用するサゴヤシに関しては，主に幹や葉の形から32種類を区別し，名前を与えている(表1)。このうち，*fupe*は中央部・東南部に居住するファス族によって，*yauma*は西北部に居住するファス族によって，最も頻繁に利用されるサゴヤシであり，*honoma*はファス族の北東に居住するフォイ族によって主に利用されている。この*yauma*や*honoma*，それに対し，*makaru*，*kasoko*は比較的標高の高い地域に分布するのに対して，*ayu*や*kakamae*，*koro*，*kupia*，*payari*，*sekere*，*warakaru*，*wapu*は比較的標高の低い地域に分布している。

サゴヤシの各部位に対するファス族の名称も詳しいものである(表2)。これらの名称に共通する*asipa*という語はファス語でサゴヤシを意味する。したがって，すべての名称は，他の植物(時には，動物や人間)にもしばしば用いられる部位を示す語とサゴヤシを表す語とを組み合わせた形でつくられている。

表1 ファス族がデンプン採取に利用する32種類のサゴヤシの方名

<i>ayu</i>	<i>kare</i>	<i>murupa</i>	<i>tipu</i>
<i>fai</i>	<i>kasoko</i>	<i>pararo</i>	<i>wai</i>
<i>foke</i>	<i>kemape</i>	<i>payari</i>	<i>wapu</i>
<i>fupe</i>	<i>kokofo</i>	<i>sapuru</i>	<i>warakaru</i>
<i>honoma</i>	<i>horo</i>	<i>sekere</i>	<i>waria</i>
<i>iraparo</i>	<i>kupia</i>	<i>sokopo</i>	<i>wasiri</i>
<i>iwa</i>	<i>makaru</i>	<i>sonake</i>	<i>yauma</i>
<i>kakamae</i>	<i>miano</i>	<i>tia</i>	<i>yokotae</i>

表2 サゴヤシの各部位に対するファス族の名称

英語名	ファス語名	英語名	ファス語名
root	<i>asipa pikinu</i>	leaf scar	<i>asipa atawe</i>
trunk	<i>asipa oto</i>	leaflet	<i>asipa ku</i>
fruits	<i>asipa wate</i>	midrib of leaflet	<i>asipa koso</i>
flower	<i>asipa kamaku</i>	midrib	<i>asipa patakua</i>
pith	<i>asipa kase</i>	leaf sheath	<i>asipa hakape</i>
bark	<i>asipa kiri</i>	sucker	<i>asipa mano</i>

表3 サゴヤシの成長段階に対応するファス族の名称

成長段階	ファス語名
1. opening midribs	<i>kara-raka sao re-a</i>
2. beginning to bud	<i>kurusu-aka hi-naka</i>
3. beginning to flower	<i>kawe kamaku-raka</i>
4. flowering	<i>kamaku-sa</i>
5. full flowering	<i>kamaku-raka mare-kea eiya muri-raka</i>
6. bearing fruits	<i>wate pe-raka</i>
7. dropping fruits	<i>wate pe-sa hurupe-raka</i>
8. dead	<i>ku-raka</i>

また、成長の度合いを区別する名称も、表3に示すように非常に詳しい。

サゴヤシ起源神話

ファス族の間には、サゴヤシの起源に関する神話があり、その中には女性がサゴヤシを産んだというモチーフがみられる。

「昔、我々の土地にはサゴヤシはなかった。サゴヤシばかりでなく、木も草も動物も何もなく、水が大地全体を覆っていた。そこに兄と妹が住んでいた。そして、妹が妊娠し、お腹がどんどん大きくなっていった。そして、そのお腹はものすごくふくれ上がり、沢山の子どもが生まれた。人間の子ども、犬の子ども、豚の子ども、鳥の子ども、その他さまざまなものが生まれた。一番最後の子どもが生まれた時、兄はその子どもをバ

ラバラに切り裂いて濁っていた水の中に投げ込んだ。すると、水は次第に澄んでいき、どんどんひいていった。そして、地面が露出してきた。そして、水没していたためぬかるんでいた地面はどんどん乾いて固まっていた。地面が固まったので、兄の方が投げ捨てた子どもがどうなったかそっと見にいった。すると、投げ捨てた子どもの頭の部分から芽が出ていた。「これは一体何だ」と見ていると、葉やトゲが出てきた。葉はどんどん大きくなっていき、幹も高くなっていった。花芽を出した後、枯れてしまった。そして、あとに沢山の種が残った。兄がタロイモを食べながらずっと見ていると、種から芽が出て再びどんどん成長していった。そこで兄は「これは食べ物なのかな」と考えて、その一本を切り倒し、髓を砕いて水をかけてみると、流れ出た水が溜まった中にサゴデンブンが沈殿していた。これを食べてみると大変おいしかった。「これはアシバだ」と兄はいった。このようにして我々はサゴヤシをアシバと呼ぶようになったのであり、我々の土地には沢山のサゴヤシがあるのだ。」

この神話に関連して、サゴヤシを移植する場合には、サゴヤシを老婆に比して唱える呪文が存在する。サゴヤシの吸根を根の所から切りながら、「ケナビ婆さん、お前の首を切るぞ」と唱え、この吸根を穴を掘って植えながら、「ケナビ婆さん、お前の頭を植えるぞ」と唱えるのである。この呪文を唱えずに移植しても、サゴヤシは成長しないと考えられていた。

また、このようなサゴヤシと女性の結びつきは、デンブンを採取した後のサゴヤシの髓を踏むことによって起こるとされる病気に関してもみられる。この病気にかかるのは男性のみであり、決して女性がかかることはない。そして、この病気になった男性を治すことができるのは女性だけであり、治療儀礼においては、男性にはまったく知られていない特殊な呪文を唱えることが必要とされた。

サゴ採集民の文化は民族誌という形で色々と報告されているが、サゴヤシに関する文化的意味付けの研究はそれほど広く行われているわけではない。今後、このような研究がさまざまな地域で行われることが期待される。